文法用語と文法力の調査

上垣宗明*

A Research on Students'Awareness of English Grammatical Terms and Their English Grammatical Abilities

Muneaki UEGAKI*

ABSTRACT

This study aims at researching the students' awareness of English grammatical terms, their English grammatical abilities and their English proficiency. To research on their awareness of English grammatical terms, first grade students had an original questionnaire in April 2018, which I had made. According to the result of this questioannaire, I divided the students into two groups. The same questionnaire had been conducted for third grade students in July 2017. To evaluate their grammatical abilities, I made an original test consinsting of 30 questions. The first grade students took this test in the beginning of April, 2018. Concerning their English proficiency, I referred to the English proficiency test which they took in April, 2018. I found out the relationship with these three factors: the students' awareness of English grammatical terms, their English grammatical abilities and their English proficiency. Furthermore, first graders' awareness of English grammatical terms has stronger relationship with the scores of Proficiency test than those of Achivement test.

Keywords : English Grammatical Ability, English Ability, Awareness of Garammatical Terms

1. はじめに

神戸市立工業高等専門学校（以降，神戸高専）に入学する学生は，中学生時代に学習指導要領に基づいた英語教育を受けてきている．現行の中学校学習指導要領は平成 24 年 4 月より全面施行されており（1），調査対象となる学生は現行の指導要領に基づき，中学校の英語学習を行ってきた．

現行の学習指導要領では，第2章　各教科　第9節　外国語の言語材料の文法事項（2）の項目に，中学時代に学習すべき文法項目が記載されている．文法事項として，「（ア）文，（イ）文構造，（ウ）代名詞，（エ）動詞の時制など，（オ）形容詞及び副詞の比較変化，（カ）to 不定詞，（キ）動名詞，（ク）現在分詞及び過去分詞の形容詞としての用法，（ケ）受身」の記載がみられる．（ア）（イ）（ウ）（エ）は，更に詳しい記述があるが，（オ）以降は，これ以上の記述がなく，上記の用語のみの記載となっている．（エ）動詞の時制についての更に詳細な項目としては，「現在形，過去形，現在進行形，過去進行形，現在完了形及び助動詞などを用いた未来表現」（3）の用語が記載されている．現在進行形や現在完了形は重要な文法項目である．しかし，松井が中学3年生，あるいは，高校1年生が完了形等を理解することの難しさを以下のように述べている．

> 完了形，完了進行形……．英語には日本語には存在しない時制がいくつもあります．中でも完了形と完了進行形は鬼門です．
> これらの時制を習うのはだいたい中 3 から高 1 あたりですが，その頃から英語がチンプンカンプンになってしまう人，とっても多いのではないかと思います（4）．

理解することが難しいと思われるにも関わらず，現在完了形は中学校で必ず教える必要があり，生徒は理解すべきものである．しかし，生徒の中にはこのような文法項目を理解できないまま神戸高専に入学している学生もいるように思われる．あるいは，中学時代は高校入試受験のために，一所懸命勉強して理解できていたにもかかわらず，受験後に忘れてしまった可能性も考えられる．

文法の指導について，現行の高等学校学習指導要領解説　外国語　英語編では，「文法については，コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ，言語活動と効果的に関連付けて指導すること．」（5），との記述があり，効果的な指導が必要であることが確認できる．

神戸高専で今後文法指導を効果的に行っていくために

*　一般科　教授

は，新入生の英文法等についての習得状況を把握することは重要である．そうすることができれば，文法項目や文法用語の指導に関して，効果が期待できる指導方法を検討する上で貴重な資料となり得る．そのために，平成 30 年度新入生に対して，文法の理解度とその内容を表している用語の周知度についての調査を行った．平成 29 年度 3 年生（平成 27 年度新入生）3 クラスの文法用語の周知度についての調査結果を利用し，2 年間の神戸高専での英語教育で，文法用語の周知度にどのような変化が見られるのかを考察する．また，この 2 学年間で，新入生時の文法テストと新入生実力試験の結果に違いがあるのかやそれらの結果と文法用語の周知度との関連などを分析する．

2. 調査について

2.1 文法用語の周知度について

文法用語の周知度について，平成 30 年度に入学した 3 クラス 120 名を対象に，平成 30 年 4 月上旬に質問紙を利用し調査した．今後，2 年次，3 年次でも同じ質問紙を利用し，文法用語の周知度の変化を調査するため，神戸高専 1 年，2 年で学習する用語も調査対象とした．調査した文法用語は 22 用語である．22 用語中 10 用語は中学校学習指導要領を参考にして抽出し，残りの 12 用語は，今後 2 年間で学習すべき用語から抽出した．用語は，一般的に授業で使われる基本的なものから少し難しいと思われるものを選んだ．表1に，その一覧を記載する．

表 1　文法用語一覧

中学で学習する用語	神戸高専で学習する用語
7 時制を下げる	1 分詞構文
8 現在分詞の後置修飾	2 独立分詞構文
9 過去分詞の後置修飾	3 仮定法過去
10 to 不定詞の 3 用法	4 仮定法過去完了
11 現在完了の経験	5 使役動詞
12 三人称単数現在の s	6 知覚動詞
14 第Ⅴ文型	13 動名詞の意味上の主語
15 文の要素	16 原形不定詞
18 補語と目的語の違い	17 強調構文
19 関係代名詞	20 先行詞を含む関係代名詞
	21 形式目的語
	22 不定詞副詞的用法の結果

質問紙は，その用語を認識して，文法内容が分かるかどうかを判断し，分かればその番号を答えるという形式である．解答する前に，成績とは全く関係がないことと完全に理解している必要がなく，その用語を見れば，なんとなく英文などが思い浮かぶかどうかで判断するように指示した．神戸高専で 2 年間英語を学習した平成 29 年度 3 年生 3 クラス（平成 27 年度入学）を対象として同じ質問紙を使い，平成 29 年 7 月に調査を行っていた．両学年の結果を比較し，2 年間の神戸高専での英語教育で文法用語の周知度に変化が生じるのかどうかや周知できる用語数の違いがテストの点数と関係があるのかを分析し，考察を加える．

本調査の統計処理は，「エクセル統計（BellCurve for Excel）」を使用した．

2.2 文法テストについて

調査対象は，平成 30 年 4 月に神戸高専へ入学した 3 クラス 120 名である．3 クラスとも 4 月中旬の入学後 2 時間目の英語の授業中に，英語文法に関する力を把握するために，30 問からなる文法テストを実施した（Appendix）．

文法テストを作成する際に，島田の以下の記述を参考にした．

> 日本人初中級英語学習者は文法性判断テストにおいて，文法的文よりも非文法的文の正答率が低い．つまり，文法的文は適格であると判断をすることができるのに，非文法的文をも容認してしまう傾向がある（6）．

島田の指摘から，本調査の対象は初中級学習者なので，非文法的な文でも，文法的とみなしてしまう傾向があることが分かる．文法的文を適格と判断するよりも，非文法的な文となっている箇所を指摘し，正しく訂正することは難しいように思える．そして，そこを指摘し，訂正できれば，その文法事項を理解できていると判断できる．問題作成時には，そのようなことに留意した．その上，出題形式に関しては，池上が，文法診断テスト作成に関しての取り組みについて，以下のように述べている．

> 多肢選択形式の場合は，選択肢そのものがヒントになっていたり，消去法などのテスト・テクニックを使って正答を選べたりする可能性があり，「正答が分からなくても正答が選べる」という大きな問題があることには留意しなければならない（7）．

この指摘に従い，出題形式として一般的な多肢選択形式とは異なり，正答が分からないと正解できないと思われる下記の形式とした．

例 1)　Which do you like good, tea or coffee ?
　　解）× ＿good＿ → ＿better＿
　2)　Who was late for school ?
　　解）○ ＿＿＿＿ → ＿＿＿＿

例のように，英文が記述してあり，それが文法的に適切かどうかを判断し，不適切な場合はその語句を適切なものに書き換える形式で，1 問 1 点の 30 点満点とした．文法的に適切な設問も 3 問含み，その場合は例 2) のように，解答欄に“○”を記入するように教示した．

同じテストを平成 27 年 7 月中旬に当時の新入生 111 名を対象に実施していた(8). その結果と今回の結果を比較し, 両学年に違いが見られるのかや文法テストと用語の周知度との関連についても検討する.

2.3 新入生実力テストについて

神戸高専では, 新入生の英語の実力を把握するために, 平成 24 年度より同じ試験問題を利用し, 入学後すぐに実力テストを実施し, 比較や分析を行っている.

実力テストは 100 点満点で, 基礎問題 70 点分を春休みの課題から出題し, 応用問題として 30 点分を過去の高校入試問題から出題している. 基礎問題は春休みの課題の理解度を評価するので Achievement Test に近い要素を多く含み, 応用問題の 30 点分は Achievement Test よりも, 過去の高校入試からの抜粋であるために, 学生の総合的な英語力を測る Proficiency Test の要素を含んでいる. それぞれ評価する英語力が異なるために, 合計, 基礎, 応用, に分けて分析した. 平成 30 年度新入生は 3 クラス 120 名と平成 27 年度新入生は 3 クラス 111 名を分析対象とし, 用語の周知度や文法力との関連についても検討する.

3. 結果について

3.1 文法用語の周知度

平成 30 年度の新入生 120 名を対象に行った文法用語の周知度の調査結果を表 2 に示す.

表 2　平成 30 年度　新入生文法用語の周知度

用語	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
人数	12	2	5	2	17	7	16	53	50	91	101
割合	9.8	1.6	4.1	1.6	13.9	5.7	13.1	43.4	41	74.6	82.8
用語	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
人数	112	47	48	45	16	7	22	112	42	5	12
割合	91.8	38.5	39.3	36.9	13.1	5.7	18	91.8	34.4	4.1	9.8

表2から, 中学校学習指導要領に記載のない文法用語を周知している学生が, 少数だがいることが分かる. その中でも, 2 独立分詞構文や 4 仮定法過去完了は, 高校 1 年か 2 年で学習するので, 知らなくても当然だが, 知っている学生が 2 人もいることに驚きを感じた. 知っていると答えた学生に直接聞いてみると,「参考書を利用して自分で勉強した.」と, 回答が返ってきた.

12 三人称単数現在形の s や 19 関係代名詞などの用語は, 90%以上の学生が周知しており, 中学時代に最低限の文法用語を学習していることが分かった. その次に周知度が高いものは, 10 to 不定詞の 3 用法で約 75%の学生が周知できているという結果であった. しかし, 授業中の様子からは, 名詞的用法, 形容詞的用法, 副詞的用法の用語は理解しているが, 実際の英文中に出てくる to 不定詞がどの用法なのかを正確に理解できていない学生は全体の 25%よりも多いように感じる.

周知度が 30%台の用語は, 14 第 V 文型(39.3%), 13 動名詞の意味上の主語(38.5%), 15 文の要素(36.9%), 20 先行詞を含む関係代名詞(34.4%)の 4 用語であった。13 と 20 は中学校の授業で学習することはないが, 14 と 15 は文法事項として学習している. 例えば, 第 V 文型に関しては, 学習指導要領で教えるべき文法事項に,「[主語＋動詞＋目的語＋補語]のうち, 主語＋動詞＋目的語＋名詞, 形容詞」との記述があり(9), 第 V 文型との記述がないので, この用語を教えることはないと思われる. 塾や参考書などを利用して勉強している学生は, これらの用語を周知していることが考えられる.

次に, 平成 29 年度に 3 年生を対象に実施した 105 名の文法用語の周知度の結果を表 3 に示す.

表 3　平成 29 年度　3 年生文法用語の周知度

用語	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
人数	70	3	63	50	46	43	51	25	21	83	50
割合	66.7	2.9	60	47.6	43.8	41	48.6	23.8	20	79	47.6
用語	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
人数	82	43	62	30	30	53	27	80	40	7	15
割合	78.1	41	59	28.6	28.6	50.5	25.7	76.2	38.1	6.7	14.3

周知度の高い順に, 10 to 不定詞の 3 つの用法(79%), 12 三人称単数現在形の s(78.1%), 19 関係代名詞(76.2%), 1 分詞構文(66.7%), 3 仮定法過去(60%)となっており, この 5 用語は, 周知度が 60%を超えているので, 多くの学生が周知できているといえる. 反対に, 周知度が低い用語は, 2 独立分詞構文(2.9%), 21 形式目的語(6.7%), 22 不定詞副詞的用法の結果(14.3%), この 3 用語は 15%以下の周知度であった. これらの 3 用語に関しては, 新出時に授業でしっかりと説明し, 用語及び内容を理解させている. しかし, 既習となると説明することが少なくなり, また, 教科書に出てくる頻度が下がるために, 用語を忘れてしまっている学生がかなりいることが分かる.

表2と表3の結果において, どの文法用語の周知度に差があるのかを, 割合で比べた結果を表4に示す. 表中の“－”で表された数値は, 30 年度 1 年生の方が 29 年度 3 年生よりも周知できている学生の割合が高いことを示す.

表 4　文法用語周知度の違い

用語	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
差	56.9	1.3	55.9	46	29.9	35.3	35.5	−19.6	−21	4.4	−35.2
用語	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
差	−13.7	2.5	19.7	−8.3	15.5	44.8	7.7	−15.6	3.7	2.6	4.5

1 年生の方が 3 年生より周知度の高い用語は, 11 現在完了の経験, 9 過去分詞の後置修飾, 8 現在分詞の後置修飾, 19 関係代名詞, 12 三人称単数現在形の s, 15

文の要素，の 6 用語であった．これらの用語は，神戸高専 2 年の教科書では，既習として扱われているために，時間を割いてまでも説明をしていない．特に，文の要素については，1 年の初期に教える用語であり，2 年生以降はほとんど触れていない．その他の用語は中学時代に学習するもので，高専での授業では，ほとんど復習していない．つまり，簡単な用語でも，普段から聞いていなければ忘れてしまうということを示している．“15 文の要素”以外は，高校入試では必ず出題される文法事項であるために，数ヶ月前まで高校入試のための受験勉強をしていた新入生の方が周知度はかなり高くなったのだろう．

3 年生の方が 1 年生よりも周知度の高い用語は，1 分詞構文，3 仮定法過去，4 仮定法過去完了，17 強調構文，で，40%以上の違いがある．これらの 4 用語は非常に理解するのが難しい項目で，高専の 1，2 年で学習する項目である．これらの用語を周知できているのは，理解するのが難しいために，普段の授業でも教科書に出てくれば，頻繁に復習しているから，3 年生では多くの学生が周知できていたのだろう．

3.2 周知している用語の合計数

次に，22 用語のうち，各学生が周知している用語の合計数を調査した．1 年生の結果を図1に，3 年生の結果を図2に示す．

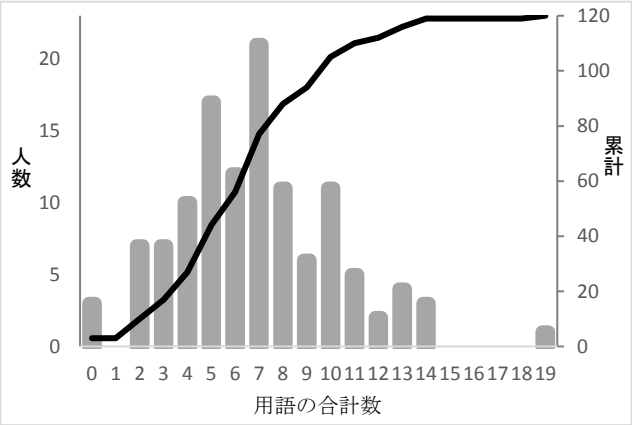

図１　１年生の用語の合計数

図1の下の値は，各学生が周知できた用語の合計数を示し，その人数を図左の値で示された棒グラフで表している．折れ線グラフは，0 語から各用語数を周知できた学生の累計を示し，図右の値で表している．周知できた用語数の平均は，6.9 用語であり，最少 0 語 3 名，最多 19 語 1 名であった．

図2も，図1と同じ様式で表している．3 年生の周知できた用語の合計数の平均は 9.3 語，最少 1 語 6 名，最多 21 語 1 名，であった．

図1と図2を比べると，図1（1年）に関しては，7 語を中心に大きな山が一つあり，用語を多く知っている学生のほうに緩やかに傾斜している．一方，図2（3 年）に関しては，4，

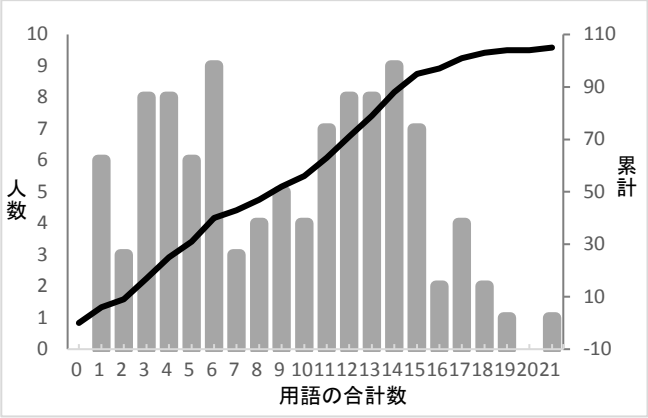

図２　３年生の用語の合計数

5，6 語を頂点とする山と 13，14，15 語を頂点とする 2 つの山を形成している．3 年では，文法用語をあまり知らない学生と多く知っている学生の 2 極化していることが読み取れる．英語の文法用語や文法項目を意識して学習する学生は，ますます多くを周知できるようになっていることを示している．

3.3 用語数の違いについて

両学年において，周知している用語数の少ない群と多い群の 2 群に分けて更に詳細な分析を加える．

平成 30 年の新入生においては，120 名が解答したが，0 語 3 名，19 語 1 名を外れ値として扱い，調査対象から省いたために 116 名が対象となった．2 語から 6 語まで周知している学生は合計で 53 名，7 語から 14 語が 63 名であった．10 名の違いがあるが，2 語から 7 語以下なら 74 名，8 語以上が 42 名となり，32 名の違いが生じる．両群の人数をできる限り同じようにするために 6 語以下を A 群とし，7 語以上を B 群とした．

平成 29 年の 3 年では，105 名が受験しているが 1 年生と同様に最少 1 語 6 名と最多 21 語 1 名を外れ値として扱い，98 名を対象とした．3 年生は，2 語から 10 語が 50 名と 11 語から 19 語が 48 名と 2 名の違いしかなかったために，10 語以下を C 群とし，11 語以上を D 群とした．

A 群（平均：4.4 語　標準偏差：1.8）と B 群（平均：9.1 語　標準偏差：2.1）では，平均の差が 4.7 語あり，コルモゴロフ=スミルノフ検定の結果，1%水準の有意差がみられた（統計量 KS：5.36　p 値：$p < 0.001$）．C 群（平均:5.7 語　標準偏差:2.4）と D 群（平均:13.9 語　標準偏差:2.33）では，平均で 8.2 語の差があり，コルモゴロフ=スミルノフ検定の結果 1%水準で有意差が見られた（統計量 KS:4.95　p 値:$p < 0.001$）．注目すべきは，各群における平均の差である．1 年生の A 群（4.4 語）と B 群（9.1 語）の差は 4.7 語だが，3 年生の C 群（5.7 語）と D 群（13.9 語）の差は 8.2 語に広がっている．ここでも，3 年生の 2 極化現象がみられる．更に，特徴的なのは，両学年における周知できる用語の少ない群（A 群と C 群）と多い群（B 群と D 群）の平均の差である．A 群（4.4 語）と C 群（5.7 語）

では, 1.3 語の差しか見られないが, B 群(9.1 語)と D 群(13.9 語)では, 4.8 語の差がある. この比較から, 普段の英語学習への取り組みの差が顕著であることが明確である. あまり用語を知らない, あるいは, 意識しない学生(A 群 4.4 語, C 群 5.7 語)は, わずか 1.3 語しか増加していないにもかかわらず, 用語等を意識して身に付け, 多く知っている学生(B 群 9.1 語, D 群 13.9 語)は, 4.8 語も周知できる用語を増やしている.

3.4 文法テストについて

平成 30 年度新入生と平成 27 年度新入生の文法テストの結果を表 5 に示す.

表 5　文法テストの結果

	平成30年	平成27年
人数	120	111
平均	23.6	21.3
最高	29	29
最低	13	9
標準偏差	3.08	4.15

両学年での平均の差は 2.3 点あり, 標準偏差においても 1.07 の差があった. 統計的に差があるのかをブルンナー=ムンツェル検定した結果, 1%水準の有意差が認められた(統計量 W:4.2　自由度:214.23　p 値:p < .001). 平成 30 年度の新入生の方が平成 27 年度の新入生よりも, 文法テストでは良い点数を取っていることが分かった.

平成 30 年の新入生の A 群と B 群で, 文法テストの結果に差があるのかをブルンナー=ムンツェル検定で分析した. その結果, A 群(平均:23.1　標準偏差:7.86)と B 群(平均:24　標準偏差:3.12)では, 平均の差は 0.9 とわずかだったが, 5%水準の有意差が認められた(統計量 W:2.02　自由度:113.1　p 値:p = 0.044). この学年においては, 文法用語を多く周知している学生が, 文法テストでよい点数を取っていることが分かった.

3.5 新入生実力テストの結果

平成 30 年度と平成 27 年度の新入生実力テストの結果を表 6 に示す.

表 6　実力テストの結果

		平成30年	平成27年	差
人数		120	111	
合計	平均	84.6	82.3	2.3
	標準偏差	8.83	9.03	0.2
基礎	平均	63.2	62.7	0.5
	標準偏差	4.6	5.3	0.7
応用	平均	21.4	19.6	1.8
	標準偏差	5.4	5	0.4

両学年の新入生実力テストにおいて, 合計 100 点, 基礎問題 70 点, 応用問題 30 点のそれぞれに統計的に差があるかを確かめるために t 検定を行った. 合計で, 5%水準の有意差が確認できた(統計量:2.17　自由度:229　効果量:0.27, p 値:p = .0314). 基礎問題では, 有意差は確認できなかった(統計量:0.76　自由度:229　効果量:0.09, p 値:p = .0452). 応用問題では, 1%水準の有意差が確認できた(統計量:2.74　自由度:229　効果量:0.37, p 値:p = .007). 結果をまとめると, 基礎問題は 70 点満点で平均の差が 0.5 点と小さく有意差はみられなかったが, 合計と応用問題で有意差が確認できた. 特に, 応用問題は, 30 点満点で平均点 1.8 点の差があり, 平成 30 年度新入生の方が高かった. 応用問題の差が合計点に影響を与え, 合計でも有意差がみられたのだろう.

平成 30 年の新入生実力テストの結果において, A 群と B 群で差があるのかをブルンナー=ムンツェル検定で調査した. その結果を表7に示す.

表 7　2 群の実力テストの結果（平成 30 年）

	合計		基礎		応用	
	Avg.	S.D	Avg.	S.D	Avg	S.D
A 群	81.9	7.69	61.9	4.2	20.0	5.13
B 群	87.3	7.47	64.5	3.5	22.8	4.96
差	5.4	0.22	2.6	0.6	2.8	0.17
統計量 W	4.14		4.11		3.29	
自由度	113.1		113.2		109.7	
p 値	< 0.001		< 0.001		0.001	
判定	**		**		**	

表7より, 平成 30 年度の新入生は, 実力テストの結果から, 文法用語を多く知っている学生(B 群)の方が, 合計, 基礎, 応用において, 有意に高い点数を取っていることが確認できた. また, 両群の基礎 70 点と応用 30 点の平均の差は 0.2 点で応用問題の方が大きかった. 得点の比率から考えると応用 30 点に対し基礎 70 点なので, 2 倍以上の差があっても不思議ではない. 配点を考慮すると応用問題の方が基礎問題よりも, A 群と B 群の差を顕著に表すことができているといえる. つまり, 周知している文法用語の差は, 基礎問題よりも応用問題の方に影響を与えているといえるだろう.

4. 結果の考察

文法用語の周知度に関しては, 同じ学年での比較ではないが, 新入生よりも 3 年生の方が平均で 2.4 語多くの文法用語を知っていることが分かった. しかし, 用語の中には, 新入生の方が周知度の高い用語が 6 語あり, 3 年生では普段の授業でよく耳にすると思われる用語の周知度が高く, あまり耳にしない用語は周知度が低かった. 中学校時代には良く耳にしていた用語でも, 高専に入学すると新しい文法事項を多く学習するため, 既習の文法を説明する時間が少なく, 解説する回数が減ってしまう. そのために, 1 年と 3 年で逆転がおこったと考えられる. また, 3 年では

2 極化が見られ，多くの用語を周知している学生とそうではない学生の 2 グループに別れていることが分かった．新入生の時よりも用語を多く知っている群とそうでない群の周知できる用語数の差が広がっていた．

両年度の新入生において，文法テストと新入生実力テストでは，平成 30 年の新入生の方が有意に高い結果を示していた．しかし，基礎問題では，文法テストの結果とは異なり，有意差は認められなかったが，応用問題では有意差が確認できた．文法テストと応用問題の結果は，平均点の差においては同じ傾向の有意差がみられた．これらは，出題範囲の指定がなく，応用問題は過去の高校入試の抜粋であるために Proficiency Test の要素を多く含んでいる．文法テストは，総合的な英語力は評価できていないが，中学 1 年生から中学 3 年生までの学習内容から出題しているために，基礎問題よりも応用問題で評価できる能力に近い英語力を評価していたのだろう．基礎問題は全て春休みの課題から出題されているので，Achievement Test の要素を含んでおり，応用問題は Proficiency Test の要素を含んでいることから考えれば，文法テストは Achievement Test より Proficiency Test に近い要素を含んでいたと考えられる．

平成 30 年度 1 年生で，A 群（周知している用語数：少）と B 群（周知している用語数：多）について調査した結果，文法テスト，実力テスト（合計，基礎，応用）で有意差が確認でき，全てにおいて B 群の方が高かった．特に，応用問題は平均点の差が大きく，両群の差を顕著に表していた．周知できる用語数の違いが，文法テストや新入生実力テスト，特に応用問題の結果に影響していると推測できる．

平成 30 年度 1 年生と平成 27 年度 1 年生の比較では，文法テストと新入生実力テストの合計と応用で有意差が確認でき，平成 30 年度 1 年生の方が平均点は高かった．平成 30 年度 1 年生の A 群と B 群では，文法テスト，基礎問題，応用問題の全てにおいて，B 群の方が有意に平均点は高いことが分かった．基礎問題の 2 学年間の比較のみ有意差が確認できなかった．今回の調査では，学年間での比較よりも，周知している文法用語数に差がある 2 群の比較の方が，文法テストや新入生実力テストの結果の差を顕著に表すことができていた．

5. 今後の課題

文法テストと新入生実力テストは，2 学年で，入学して間もない時期に実施したが，文法用語の周知度の調査は，1 年の 4 月（平成 30 年）と 3 年の 7 月（平成 29 年）で，異なる学年で実施したものを比較せざるをなかった．今後は，過去の資料などを有効に使えるようにするためにも，同じ学年や同じ時期に実施できるような工夫が必要である．

今回の調査では，文法用語と文法事項をそれぞれに分けて調査した．そのために，個々の文法用語と文法事項の相関については分析できていない．今後，知っている文法用語とその用語が示す文法事項が理解できているかどうかを学生個人，文法事項や用語，それぞれに焦点をあてて詳細に調査する．学生が理解できていない文法事項や用語を把握することができれば，学生の個々にあった効果的な指導が可能となる．また，学生の多くが周知できていない用語や理解できていない文法事項が分かれば，授業内容を厳選し，効果的な文法指導に役立てることができる．

英語の授業において，新出の文法事項を学生が理解できるまで繰り返し教えることは，かなりの時間が必要である．文法事項とその用語を同時に習得できれば，既習の文法用語を聞くだけで，その内容を頭に思い浮かべることができるようになり，用語のみを使っての説明が可能となる．既習の文法項目を確認するときに，その用語を使うだけで十分といえる．授業という限られた時間内で時間の短縮ができれば，他の学習活動に時間を割くことができ，時間を有効に使った効果的な授業実践が期待できる．

参考文献

(1) 文部科学省 現行学習指導要領の基本的な考え方 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/index.htm

(2) 文部科学省 中学校学習指導要領第 2 章 各教科 第 9 節 外国語 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/ gai.htm

(3) (2) と同じ

(4) 松井博，https://brighture.jp/b-blog/1281

(5) 文部科学省，高等学校学習指導要領，p.92 平成 21 年 3 月．
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427_002.pdf

(6) 島田勝正：「文法性判断テストにおける問題文提示時間制限の有無と明示的・暗示的知識」，英文論評，第 24 号，pp.41-53，2010

(7) 池上直人：「英文法診断テストの作成の試みー設問形式と採点・診断方法の検討ー」，松山大学言語文化研究，第 28 巻，第 2 号，pp.121-143,2009.

(8) 上垣宗明：「動機づけと英語力について」，神戸市立工業高等専門学校研究紀要，第 54 号，pp.27-32，2016.

(9) (2) と同じ

Appendix（抜粋）

1, Was the letter writing by him?
2, Every boys likes to watch this movie.
3, Tom and Ken is good friends.
4, They are play the guitar now.
5, These cakes were made yesterday.
6, My sisters was out when I came back.
7, Jane is knowing Tom’s father.